

# 遙かなる風雪

実録・柴田音吉洋服店

⑨

## 大正中期——ガスアイロン発明さる

川大正  
宮別中  
一邸期  
で舞  
・開子  
・パヴ  
ーイ  
テラ  
イ、  
華元  
やか  
か栖



大正年間、世相はめまぐるしく変った。民主主義的思潮の一方、これを抑圧しようとする軍備拡張派の動きなど、動揺のこの時期、ブルジョアジー、中間層は大きく成長していった。

■商都大阪、そして神戸もめざましい発展をとげつつあり、洋服の需要もそれにつれて伸びた。

音吉は、大阪駅前の一龍軒という食堂を従業員のたまり場、足場として、大阪での商いをひろげていく。すでに明治38年、神戸—大阪間の阪神電鉄も開通していた。

柴田の店にも、一龍軒にも電話があることに、人びとは目を見はった。

柴田の名入りの人力車を2台置き、市内を回って見本片手にラシャの注文をとり、出来上った洋服を届ける。パリのオートクチュールが黒塗り名前入りの箱型車で街を行くのに似た風景であった。

ツメ衿に金ボタン、学生帽柴田の営業部の従業員は、大正初期から中期にかけて、その「制服」で外回りをした。まだ神戸、大阪のラシャ商では、木綿のアツシが通り相場のころだ。

デッチ仲間の羨望とひやかしの目は避けられなかった。技術部と名づけられた職場はしかし、大正10年ころまで、

和服姿が多かった。洋服は彼らにとってまだ「働き着」としては何ともきゅうくつだったし、便利なセーター、ジャンパーが普及する時期には遅かった。

「ウチで仕事するものは、働きやすいものを着ればいい」。家族、従業員の外着には熱を入れる音吉にも、そういう磊落なところがあった。

大正7年、それまでの炭火アイロンがガスアイロンにとって替った。

神戸元町の商店街で、いちばんガスの使用量の多いのはキンツバの高砂屋か、洋服の柴田かといわれた。それほどおびただしいガスがアイロンのために消費された。

これより少し先、大正5年柴田の店の工賃は、上衣が4円、7年後にはこれが6円、チョッキ2円50銭、ズボン3円であった。

大正7年、柴田の洋服の上代は75円、11年には100円になった。他店の値段は38円から50円くらい。

当時、100円は大金である。

腕の良いある職人がいた。小学校を出て大正5年に柴田の店に入り、年期あけの7年後、月に100円を稼ごうと思立った。年期があけると出来高払いという制度の恩恵を最大限に受けるため、その目標を100円に設定した彼は、

文字通り夜を日に継いで仕事を引受けた。

月末、彼の手には93円が渡された。ほぼ目標に迫った彼のがんばりに、音吉はうなずいて笑った。「70円の月給にしてやろう」。家賃2円、大工の工賃が日に1円50銭、西の帝劇といわれた神戸「聚楽館」の入場料が特等1円50銭、1等1円といったころ、大正7年に営業部に入った店員の初任給が7円というのにくらべて、70円の月給は破格といえた。

人を見、腕を見てのことであったにしろ、あくせくと出来高を気にするより、心ゆくまでの仕事をという音吉のはからいが、彼の心にしみた。

この人はいまなお柴田に出入りし、「道楽で——」などといいつつ、数十年きたえた腕のおもむくまま、仕事を楽しむこともある。

× ×

柴田で修業した職人たちのなかには、このほかにも一風変った男たちが幾人かいた。

台湾からハダカー貫でやってきた王連峯もそのひとり。

軍隊の被服部にいた男だ。日本の支配下にあった台湾では、当時しきりに武装反乱が起り、一方生活水準は低く、本土へ安住の地を求めてくる出稼ぎの台湾人も多かった。

どうしても働らかせてくれといひ、居坐って働こうとしない王連峯に、音吉はやむなく職場を与えた。職人の選択にきびしかった音吉が、ただ一度だけ根負けしたエピソードである。

王はその後しばらくいて、やがて風のように消えていった。(つづく)

岡 和子記者